

指導資料

鹿児島県総合教育センター

キャリア教育 第2号

一小、中、高等学校対象
平成24年10月発行

学ぶ意欲を高めるキャリア教育の改善

平成20年3月に公示された学習指導要領では、全ての教科において、これまで以上にキャリア教育の推進が求められている。

そのような中、平成23年1月中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、キャリア教育について、「一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準に、ばらつきがある」、「学校での学習に自分の将来との関係で意義が見いだせず、学習意欲が低下し、学習習慣が確立していない」といった状況が指摘されている。

そこで本稿では、キャリア教育の基本を明らかにした上で、児童生徒の学ぶ意欲を高めるキャリア教育について、その考え方や改善のポイントについて述べる。

1 キャリア教育の理解の共有

キャリア教育を推進する上で、全職員が共通理解すべきポイントを、前述の答申を基に示す。

(1) キャリア教育の新たな定義

キャリア教育の定義
一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

これまで、「端的には」という限定付

きながら「勤労観、職業観を育てる教育」と定義されていたことで、勤労観・職業観という価値観の育成のみに焦点が絞られてしまったことを改善するために、新たに定義されるものである。ただし、勤労観・職業観の重要性は変わらず、様々な学習や体験を通じて能力や態度を育成する中で、児童生徒が自ら価値観を形成できるように、様々な学習を系統的体験的に行うことが重要であることに変わりはない。

(2) 「キャリア」について

キャリアの定義
人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね

人は、職業、家庭、地域社会の一員など、様々な役割と責任を担いながら生きており、時間の流れの中で変化していくものである。これを例として示すと図1のようになる。

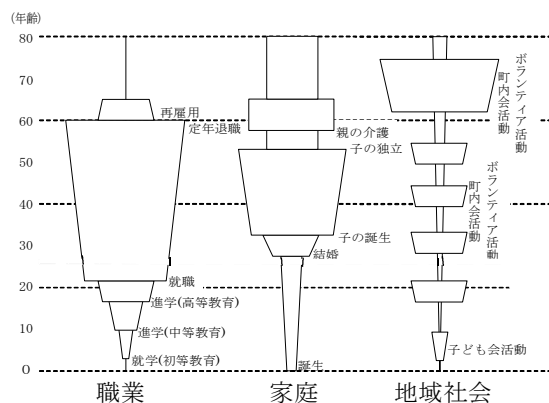


図1 個人のキャリアの例

このように就学期間中における学校を職場とすると、児童生徒にとっては、学校が社会であり、学ぶことを働くことと同意であると捉えることができる。「キャリア教育は特定の活動や指導方法に限定されるのではなく、様々な教育活動を通して実践されるものである。」とされるのはこのためである。

(3) 「キャリア発達」について

キャリア発達の定義
 社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

人の成長・発達の過程には、節目となる発達の段階があり、それぞれの発達の段階において克服あるいは達成すべき課題がある。成長・発達と同様に、キャリア発達にも幾つかの段階があり、各段階で取り組まなければならない課題（育成しようとする能力や態度）がある（表1）。

各学校においてキャリア教育の全体計画を作成する際には、表1と児童生徒の実態

を踏まえて検討することで、身に付けさせたい力を体系的に具体化することができ、評価にも大いに役立つ。

(4) キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」

これまでキャリア教育で育みたい力として例示されていた「4領域8能力」では、例示であったにもかかわらず、学校現場では固定的に捉えてしまっているなどの課題が指摘されたため、新たに「基礎的・汎用的能力」が示された。

「基礎的・汎用的能力」の具体的内容については、「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、四つの能力に整理されている。

両者の関係は表2のとおりであり、移行するには新たに考えるのではなく、これまでの実践を生かして組み替えることができる。ただし、課題対応能力や、自己管理能力である忍耐力やストレスマネジメントなどを新しく加えて検討する必要がある。

<小学校>

表1 キャリア発達課題の例

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校生活に適応する。 ○ 身の回りの事象への関心を高める。 ○ 自分の好きなことを見つけ、のびのびと活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友だちと協力して活動する中でかかわりを深める。 ○ 自分の持ち味を発揮し、役割を自覚する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の役割や責任を果たし、役立つ喜びを体得する。 ○ 集団の中で自己を生かす。

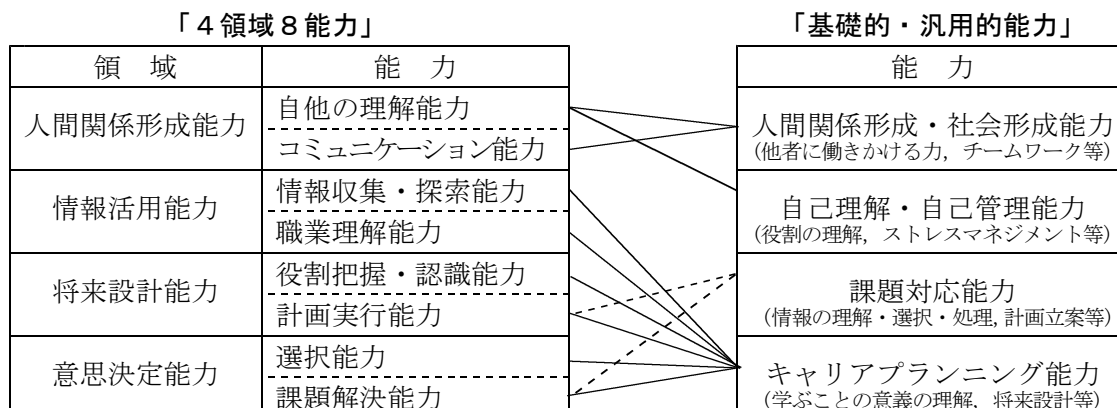
<中学校>

1年生	2年生	3年生
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分のよさや個性が分かる。 ○ 自己と他者の違いに気付き、尊重しようとする。 ○ 集団の一員としての役割を理解し、それを果たそうとする。 ○ 将来に対する漠然とした夢やあこがれを抱く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の言動が他者に及ぼす影響について理解する。 ○ 社会の一員としての自覚をもち、社会や大人を客観的に捉える。 ○ 将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し、模索する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進める。 ○ 社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 ○ 将来設計を達成するための困難を理解し、それを克服するための努力に向かう。

<高等学校>

1年生	2年生	3年生
<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい環境に適応するとともに、他者との望ましい人間関係を構築する。 ○ 学習活動を通して、自己の能力適性を理解する。 ○ 様々な情報を収集し、進路選択の幅を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 他者の価値観や個性を肯定的に認め、受容する。 ○ 自己の職業的な能力適性を理解し、将来設計を図る。 ○ 進路実現に向けた課題を理解し、検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己の能力適性を的確に判断し、卒業後の進路について具体的な目標と課題を定め、実行に移す。 ○ 理想と現実の葛藤を通して、困難を克服するスキルを身に付ける。

表2 「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」の関係



※ 破線は両者の関係性が相対的に見て弱いことを示す。

2 学ぶ意欲を高めるキャリア教育の基本的な考え方

(1) キャリア教育と学ぶ意欲の関係

中央教育審議会では、キャリア教育を行う意義を、「学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付けることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さを確認できる」と答申している。

学習意欲は、内発的な学習意欲とそれを支える有能感、自己決定感、他者受容感に注目する場合が多いが、市川(2001)は、学習意欲を引き出す動機を、図2のように六つに整理している。

六つの志向は、どれを高くもっていればよいというものではなく、学ぶ対象によって、内容がおもしろいから意欲的に学べるときもあれば、おもしろくないことでも学ぶ必要性を理解することで意欲的に学べることを示している。大切なのは学習意欲を引き出す動機づけが複数あるということである。

つまり、学ぶ意欲の観点から見ると、教科の学習とキャリアに関する学習は、二者択一的な関係ではなく、職業や進路などキャリアに関する学習が、学習の功利性の面から学ぶ意欲を引き出し、教科の学習が学習の重要性の面から学ぶ意欲を引き出すという、相互補完的な関係になっているのである。

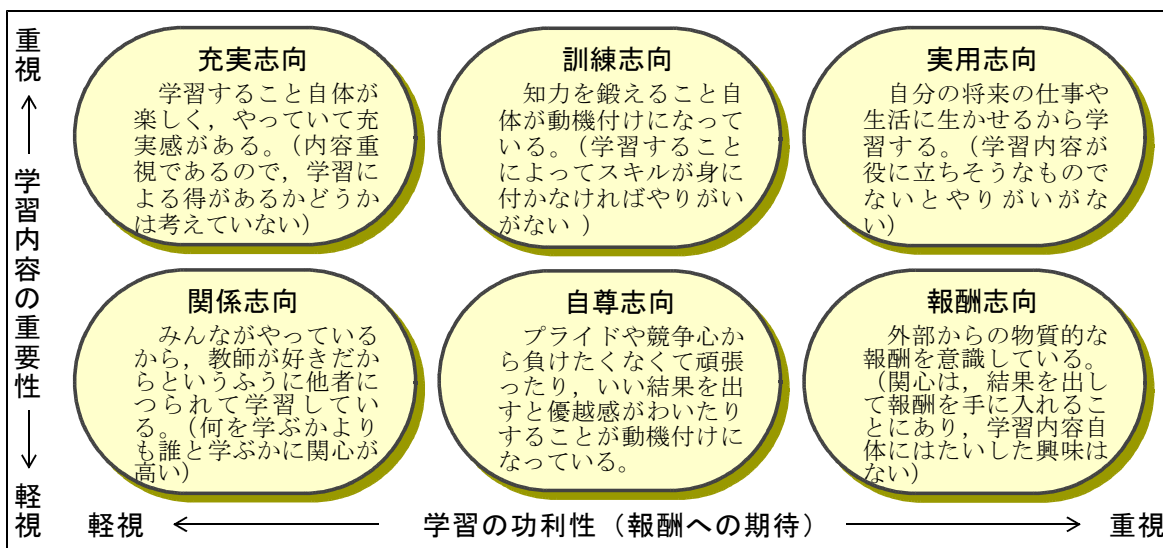


図2 学習意欲を引き出す六つの志向モデル

3 学ぶ意欲を高めるキャリア教育改善のポイント

キャリア教育は、教育活動全体を通じて取り組むものであるため、新たな活動を追加したり、特定の活動を重視したりするのではなく、今ある教育活動をキャリア教育の視点から見直すことが効果的である。

(1) 各教科、領域等における工夫

教科、領域等には、必ず学ぶ意義がある。教科、領域等では、キャリア教育を推進するために特別な学習展開を意識するのではなく、本来のねらいを達成するための授業を大切にすることが基本である。その上で、「教科、領域等の本質は何か」、「教科、領域等を学習させる意義は何か」を教師が再確認し、全職員がそれを意識して授業を行うことから始めることが肝要である。

(2) 教育課程への体験活動の位置付けの工夫

児童生徒が、学ぶ意欲はあるが行動に移せないでつまづいている場合には、体験を通じて目的達成に必要な手段・方法を学習させることが大切であり、特に他者との切磋琢磨や試行錯誤を通じて、身近なモデルから学習させると効果的である。

そのためには、表3のように日常の学習活動からキャリア教育にかかわる体験活動を整理し、教育課程に位置付ける必要がある。

その際、体験活動を行うこと自体が目的ではないことを再確認して指導することが重要である。

表3 キャリア教育にかかわる体験活動例(小学校)

	○は、キャリア教育と関連が深い体験活動 ◎は、職業に直接かかわる体験活動
特別活動	○ 係活動 ○ 清掃活動 ○ 給食に関する活動 ○ 委員会活動、児童会活動 ○ 異学年による縦割り活動 ○ 高校生との交流、中学校見学 ◎ 酪農体験等を組み込んだ宿泊学習 ◎ 職場見学等を主体とした修学旅行
総合的な学習の時間	○ 留学生との交流 ○ 課題に基づく地域の調査 ○ アイマスク・車いす体験 ○ 特別養護施設の訪問や特別支援学校との交流 ○ 幼稚園、保育所との交流 ○ 地域の伝統を学ぶ ◎ 校区の職場見学 ◎ あこがれの仕事調べ ◎ 農業体験 ◎ 地域の特産品づくり ◎ 商店でのお手伝い ◎ 地域の名人に学ぶ ◎ 地域のお年寄りに学ぶ ◎ 地域の芸術家に学ぶ ◎ 身近な人の職業から学ぶ
教科	○ 校区の探検(生活科) ○ 栽培活動(生活科・理科) ○ 家族調べ(生活科) ○ 幼稚園、保育所訪問(生活科) ◎ 工場や農家の見学(社会科) ◎ テレビ局の見学(社会科) ◎ 消防署、警察署見学(社会科) ◎ お店調べ(社会科) ◎ 郵便局や市役所等の見学(生活科)

「なぜ学ぶのか」、「なぜ学ばなければならないのか」、「何を学ぶべきか」を学ぶことができるキャリア教育は、学ぶ意欲の向上に極めて有効であり、長期的な目標を持つことで働く意欲につながるはずである。キャリア教育の充実が求められる今日、児童生徒が、社会人として自立を目指し、意欲をもって学べるように、これまでの実践を生かしながら着実に取り組んでいくことが肝要である。

－引用・参考文献－

- 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」平成23年
- 市川伸一著「学ぶ意欲の心理学」2001
- PHP研究所
鹿児島県総合教育センター「研究紀要111号」
平成19年3月

(教科教育研修課)